

「彼女にあげるもの」

五戸町立倉石中学校 三年 高村 玲香

「この子は、神様から授かった子なんだよ。決っしていじ悪し
てはいけないよ。」
それは私の祖母がいつも言っていた言葉でした。この子、とは私
の叔母にあたる人で、障害者です。彼女は養護施設へ入っていて、
家にくるのは正月やお盆くらいです。
私は彼女が家にくると食事やトイレをする時のお世話をします。
彼女は幸せなのだろうか、ということですが、
彼女は、言葉を言うことができないので、幸せかどうか彼女の
口から聞くことはできません。彼女はいつもニコニコ笑っている
ばかりです。
施設の方々は彼女のことを

「いい子だね。」
といつも褒めて、可愛がってくれています。そして、私の家族も
彼女のことを大切に思っています。だから、彼女は周りの人達か
ら愛されている、と私はそう思っています。確かに彼女は愛され
ています。しかし、彼女自信は自分のことをどう思っているの
でしょうか。私はそれがいつも気になります。

障害者という立場は決していいとはいえないと思います。それ
が一番分かるのは、彼女と出かけた時の周りの反応です。周りの
人達は彼女を見るとこの人は障害があるんだとたぶん思うのでし
ょう。彼女を、健常者と同じように見て、優しく接してくる人も
います。中には彼女のことをかわいそうな目や好奇の目で見た
り、すれ違った後でヒソヒソと話したりする人もいます。

もし私が彼女のような障害者の立場なら、とても悲しくて耐え
られないと思います。だから、私が彼女と同じ立場なら、私は「幸
せですか。」と聞かれたら「幸せではない。」とはっきり答えます。
障害者という立場でも明るく生きている彼女は、素晴らしいと思
うし、祖母が言ったように「神様から授かった子」だと思います。
彼女を見てみると私ももっと頑張らなくてはという気がしてき
ます。私は、彼女からいろいろと学ぶこともあります。彼女の存
在は、私にとってとても大きなものです。だから、彼女をもっと
幸せにしてあげたいと思っています。

彼女の面倒を見てた私の祖母は年をとって介護をするのも大変
になってきたので、私が彼女を支えていけるようにしたいと思
っています。彼女の介護を通して私は何よりも他の人達に障害者
のことをもっと理解してくれる世の中であってほしいと思います。
障害者の人達が快適に暮らせるように設備を整えることも大切で
すが、一番考えなければいけないのは、私たち健常者の考え方で
す。障害者にとって一番つらいことは、健常者とは違う目で見ら

れるということだと思いません。障害者のことを少しでも理解してあげようと思うだけでも変わってくると思っています。

彼女が私に頑張ろうと思う気持ちくれたように、私は彼女に幸せをあげたいです。障害者は、日本にも世界にもたくさんいます。その障害があるせいで幸せを感じられない人が幸せになれるようにしてあげるのが健常者の務めだと私は思います。

だから、私は彼女にたくさんの幸せと生きることの楽しさをあげたいです。幸せや楽しさをあげるためにはどうすればよいか具体的な方法はまだ分かりません。しかし、私は自分にできる限りのことを精いっぱいしていくことをここで誓います。

「神様から授かった子なんだよ。」

と言った祖母の言葉は本当でした。彼女は今日も明るく生きています。そしてずっと、人々に頑張ろうという気持ちをくれるだろうと思います。そして、いつか私も幸せと生きる楽しさを彼女にあげたいし私自身も幸せになりたいです。

しかし、私はまだ十五歳の中学三年生です。障害のある人たちにどのようにしてあげれば、幸せと生きる楽しさを感じさせてあげられるのか、よく分かりません。だから、まずは、自分が障害者だったら、どんな社会なら暮らしやすいのか考え、それを大人になつたら実行していきたいと思っています。そこでいろいろ考えてみました。

生活支援をしてくれる人には優しく愛情をもって接してほしいと思います。言葉では通じないかもしれませんが、きつと分かっ

ていると思いません。

たまにはオシヤレもしたので、明るい色の洋服も着たいです。口紅なんかもつけてみたいので、お化粧品もしてほしいです。

これはあくまでも、もしも私が障害者だったら、という視点で書いたもので、障害者の人たちは、もっといろいろなことを望んでいかもしれません。私の叔母も。だから、私は障害者の人たちが少しでも暮らしやすい世の中をつくれるように頑張る大人になりたいです。